

自己肯定感をはぐくむ特別活動

—生徒会活動を中核にした学校づくりを事例として—

佐藤陽一

I はじめに

望ましい集団活動を通して生徒を育てることを方法原理とする我が国の特別活動が、近年、「tokkatsu」として海外から注目されていることが新聞で報道されている⁽¹⁾。この記事を目にした際に筆者は、生徒の自主性を重んじ、自主的、実践的な活動を展開し、生徒個々に社会性や自己を生かす能力等をはぐくむ特別活動の教育的意義についての認識を一層深くした。

しかし、一方、中学校教育の場においては、いじめ、不登校、暴力行為等の生徒指導上の諸課題が長期化・慢性化していることに加えて、都市化、少子高齢化、地域社会における人間関係の希薄化などが進む中で、家庭や地域社会において社会性を身に付ける機会が減少していることが懸念されている。また、集団の一員としての自覚の欠如等による生徒会活動等の沈滞化も中学校教育の課題のひとつとしてあげられている⁽²⁾。これらの課題の解決に当たっては、生徒それぞれに集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め自己を活かす能力を養うことを目標とする特別活動を一層、活性化させるとともに生徒指導との連携を図り、諸課題の解決に当たることが強く求められていると考える。

そこで、次のⅡでは、特別活動の教育的な意義と筆者が関わった生徒の現状について改めて整理する。そしてⅢでは、自己肯定感をはぐくむ生徒会活動を中核にした学校づくりを進めることによって、特別活動の目標に迫るとともに、いじめ、不登校、暴力行為等の生徒指導上の諸課題の改善を図ることを目指した相模原市立中央中学校における3か年にわたる実践事例を紹介する。

さらにⅣでは同校の実践の成果や次期学習指導要領を視野に入れた教職課程における特別活動論の授業づくりについて論究する。

なお、ここで取り上げる事例は、筆者の校長としての実践記録である。また、これは日本特別活動学会による第1回推奨実践事例に選考されたもの（2015.6）であり、この度の論集掲載に当たり、それに一部を補足したことを申し添える。

Ⅱ 自己肯定感と特別活動

中学校学習指導要領の特別活動の目標等に「人間関係を築く」及び「人間関係を形成」との文言が新たに付け加えられたことの意味や特別活動の教育的な意義について生徒の現状を踏まえながら、改めて整理する。

1 人間関係づくりに係る状況と特別活動の目標の一部改正

子どもたちの対人関係や社会性の未熟さが指摘される中であって、現行の中学校学習指導要領 第5章 特別活動では、その目標に「人間関係を築く」及び学級活動・生徒会活動・学校行事の目標に「人間関係を形成」と

の文言が新たに加えられた。

また、中学校学習指導要領解説 特別活動編 2008.9 (p.3) では、改善の基本方針として「よりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治的能力の育成を重視する」、「自分に自信が持てず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況が見られたりすることから、それらにかかわる力を実践を通して高めるための体験活動や生活を改善する話し合い活動、多様な異年齢の子どもたちからなる集団による活動を一層重視する」ことが示された。

これらのことから各中学校においては一層、生徒が互いに認め合ったり、高め合ったりする活動や学校内外の交流活動等を活性化させ、人間関係形成能力の向上や自尊感情等をはぐくむことが求められることとなった。

2 自己肯定感をはぐくむことと教育効果と生徒の現状

1) 先行研究等が示した自己肯定感・自己有用感をはぐくむことと教育効果

中央教育審議会「次代を担う自立した青少年の育成に向けて（答申）」⁽³⁾ では、青少年の間で学習や労働といった具体的な対象への意欲の減退だけでなく、成長の糧となる様々な試行錯誤に取り組もうとする意欲そのものが減退している背景には、青少年の自己肯定感の低さなどがみられることが指摘されている。

さらに国立教育政策研究所『生徒指導リーフ増刊号 いじめのない学校づくり』2013.11 (p.12) では、「自己有用感」について「単なる自己肯定感や自己存在感ではなく、相手からの好意的な反応や評価があって感じることで自己の有用性のことを自己有用感と呼びます。他者から認めてもらえていると感じられた子供は、いたずらに他者を否定することも、攻撃することも減ります。相手を貶めて自分の存在を相対的に高めるといふ必要がないからです。さらには、相手のことも認めることができるようになっていきます。すべての児童生徒に対して、授業や行事の中で活躍できる場面を設定していくことが、いじめの未然防止につながります」と述べている。

次に不登校状態の改善について、国立教育政策研究所『紀要 第138号』2009.3に掲載されている滝充「研究ノート 中1不登校調査 再考」PP.164-165では、対人関係への配慮、チーム会議の開催、対人関係の改善（学級という単位にこだわることなく異学年や小学生との交流、職場体験等を利用して自己有用感・自己存在感を獲得させる）等の手立てが不登校状態の改善に一定の効果があったことを記している。

以上のことから自己肯定感や自己有用感をはぐくむことは、特別活動の目標の一つである人間関係を築くことに加えていじめ、不登校、暴力行為の改善や学校生活への意欲の向上につながると考えられる。

2) 全国及び相模原市立中央中学校第3年生徒の自尊感情や人間関係づくりの状況

文部科学省が毎年4月に実施している全国学力・学習状況調査の「自分には、よいところがあると思いますか」との自尊感情を問う質問紙調査で、「どちらかと言えば当てはまらない」及び「当てはまらない」との否定的な回答をした全国の中学校3年生は、例年、全体の3割を上回っており⁽⁴⁾、筆者が校長として勤務した相模原市立中央中学校においてもほぼ同様な結果であった。

さらに、同校教職員に校長が同校生徒の自尊感情や人間関係づくりの状況について聞き取りをしたところ、代表的な意見は、次のとおりであった。

- ① 学級や学年集団づくり等に貢献しようとする意欲はあるが、周囲の眼を必要以上に気にし、傍観者の立場に身をおこうとする傾向があること。
- ② 交友関係の輪がなかなか広がらず、仲間内に閉じこもりがち傾向にあること。
- ③ 自己抑制ができず、一時的な感情による生徒間暴力・暴言や器物損壊が見られること。

なお、大半の生徒は明るく学校生活を過ごしているが、生徒指導上の課題や地域とのかかわりについて次のことがあげられた。

【各種の校内調査及び職員会議の意見等から整理した学校内外における生徒指導上の諸課題】

- ① 毎年、不登校生徒の出現率が3～4%を推移していること。

- ② いじめのアンケート（年２回実施）や教育相談アンケート（各学期１回実施）では、重大な事態ではないが、「いじめを受けた」や「いじめを目撃した」との回答が数件、寄せられていること等。
- ③ 自分が住む地域の出来事への関心の低さ。
- ④ 地域で褒められた体験の乏しさ等。

Ⅲ 教育実践事例の紹介

筆者が校長を務めた中央中学校では、生徒指導上の諸課題（前ページの枠内）を改善するために前述の先行研究の知見を取り入れ、３年間にわたって自己肯定感をはぐくむ生徒会活動を中核にした学校づくりに取り組んだ。ここでは、Ⅳで述べる大学における特別活動論の授業のあり方を考えるためにその内容や同校による評価・反省も併せて紹介する。

なお、論集掲載に当たっては当時のままの記述とする。

１ 実践校・実践期間

相模原市立中央中学校（21 学級・生徒 686 名 2015.5.1 付） 実践期間 2013.4～2016.3

２ 実践研究構想

１) 研究主題等

研究主題 自己肯定感をはぐくむ生徒会活動を中核にした学校づくり

同副主題 互いに励まし、認め合う生徒の輪を広げる

２) 主題設定の理由

生徒たちが自分のよさを知り、互いを尊重しながら諸活動に意欲的に取り組む学校づくりを目的に学習指導要領の改善の基本方針や先行研究による示唆、さらには生徒の状況等を踏えて実践研究主題と副主題を上記のとおり決定した。

３) 実践研究の切り口と力点

暴力行為、いじめ、不登校等の生徒指導上の諸課題の発生や自尊感情の低さ等は、家庭環境、生育歴、情操、価値観、所属する集団の雰囲気などの多くの要因が相互に絡み合って生じるものと考えられる。

これらの課題と正面から向き合い、公立学校として何をなすべきかについて思いを巡らした結果、教育の原点である「励まし、認め合う」ことの重要性和地域を基盤に学校は存立しているという極めてベーシックな事実に行き着き、地域等との連携を図りながら「生徒が互いに励まし、認め合い、自己肯定感をはぐくむ」ことに全校で取り組むこととした。

また、実践に当たっては「人間関係を築く」ことを目標とした特別活動を切り口とし、生徒間の濃密な交流が求められる生徒会活動や学校行事の工夫・改善に重点をおくこととした。

なお、この実践研究に当たっては、実践研究主題を「自己有用感をはぐくむ」とすることが適当と考えたが、従前から保護者・地域に「自己肯定感をはぐくむことの重要性」を伝えてきた経過があったため、敢えて「自己肯定感」を主題に掲げた。

また、ここで述べる「自己肯定感」が意味するものは「自分に対する評価を行う際に自分のよさを積極的に認める感情（『子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための Q & A』東京都教育委員会教職員研修センター 2011 p. 6）とした。

４) 研究仮説と教職員の共通理解

自己肯定感をはぐくむことによって、多少の困難に直面しても、そこから逃げない粘り強さや勇気が発揮されよう。また、その姿と心情は、生徒集団に伝播し、ともに協力しあう態度の形成やよりよい学校づくりに向けての活動に資するとの仮説をたてた。そして、「生徒が互いに励まし、認め合い自己肯定感をはぐくむことは生徒

指導上の諸課題等の改善や学校教育重点目標の達成につながる」との認識を全教職員で共有し、具体的な実践に努めた。

なお、生徒へのはたらきかけについては、次のことを申し合わせた。

【学級指導・生徒指導に当たって】

- ① 肯定的表現を多くする……「ダメだ」のような否定的な言葉よりも「ありがとう」等の肯定的な語りを
する。
- ② 結果を評価するだけでなく、経過を評価する……「あの場面は、頑張ったね」
- ③ 周囲の声を届ける……「上級生が褒めていたよ」「Aさんが喜んでいたよ」
- ④ 個々の生徒の活動を全校生徒が見えるようにする……学校ホームページへの掲載、掲示板・広報紙の充実。

5) 実践研究の方針

- ① 生徒が互いに認め合う場面を意図的に設け、自己肯定感・自己有用感をはぐくむ。
- ② 生徒会活動のみならず、学校行事では生徒を主体とする場面や活動を多く設け、自分たちで決定し、自らそれをやり遂げた喜びを体験させる。
- ③ 地域連携活動に取り組み、地域社会の一員としての自覚や社会貢献意識の涵養を図る。
- ④ 学校の取り組みを保護者・地域に発信し続け、学校教育活動への理解と一層の支援を得られるように努める。
- ⑤ 本実践研究の評価資料の一つとして、年度末の学校評価で行う生徒向けアンケートを活用し、生徒意識の変容を追う。

6) 具体的な取り組み

通常の学校教育活動に加えて、上記5)の実践研究の方針を受けて、学校運営の柱である生徒会活動、学校行事、地域連携活動等で自己肯定感をはぐくむことや生徒指導の三機能といわれる共感的人間関係・自己存在感・自己決定場面づくりのために、次の【表1】の事柄に重点的に取り組むこととした。

【表1】

趣 旨	活動主体	主な取り組み事例
生徒が生徒のよさを認める	生徒会	中央ツイート
地域等が生徒のよさを認める	生徒会・部活動等	地域行事への協力・参加
教師が生徒のよさを認め、励ます	教職員	中央宝石賞の授与
学校の雰囲気づくり	生徒会・各学年	朝のあいさつ運動
生徒活動場面の新たな創出 (異学年交流、自己決定場面づくり)	生徒会・部活動・各学年	小学生にかかわる活動 校則の見直し等

3 教育実践記録

ここでは、紙幅の都合もあり、重点的に取り組んだ事例の概要を紹介する（記載は当時の記録のままとする）。

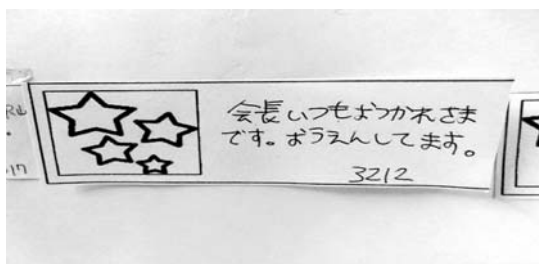
1) 生徒が生徒のよさを認める【資料1参照】

中央ツイート（中央中学校版 生徒による生徒のよいところ探し）の試み

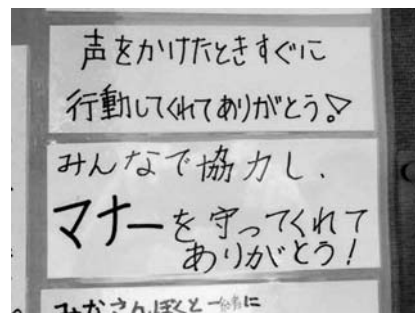
- ① ねらい 行事や生徒会活動への評価・反省及び仲間へのメッセージを交換し、取り組みの改善や意欲向上につなげる。
- ② 方 法 年間を通じて、中央ツイートコーナーに備えたツイート用紙（付箋大のサイズ）に生徒個々が自己の思いや意見を書き込み、該当するコーナーに貼付する。



中央ツイートコーナー



生徒会長に寄せられた応援のツイート



返信されたツイート

- ③ 活 用 生徒会本部は貼付されたツイート用紙をストックし、年間ベストツイートを選んだり、多くの共感を呼んだ生徒にその旨を知らせたりする。

- ④ 成 果 この取り組みが定着化してくると応援のツイートを寄せられた生徒から返信が発せられるようになり、自己有用感を深める機会になっていった。また、この中央ツイート及び後述するあいさつ運動等の取り組みは、相模原市教育委員会が主催した「市いじめ防止フォーラム 2015.11.15 開催」にて、発表の機会を与えられた。当日の彼らの真摯な発表には参加者から大きな拍手が寄せられた。



相模原市いじめ防止フォーラムの様子

2) 地域等が生徒のよさを認める試み

「中学校学習指導要領解説 特別活動編 2008.9」の学級活動の内容(2)の「カ」及び生徒会活動の内容(5)、さらには学校行事の内容(5)において、集団や社会の一員としての自覚を深めるボランティア活動に参加することの教育的意義が記載されている。本校生徒にとっても、地域行事にボランティアとして活動に参加し、多くの成人と接することや地域での活動を通じて年長者から褒められたり、認められたりした体験は研究主題の達成につながると考えて積極的に取り組むこととした。

① 地域行事「相模ねぶたカーニバル」に生徒・PTAが協力・参加

相模ねぶたカーニバルは1993年に「子どもたちの思い出・ふるさとづくり」をテーマに秋田県能代市の協力を得て、始まった祭りであり、光と音のファンタジーで相模原の秋の夜を彩る行事である。本校では、毎年、夏季休業期間から、生徒会本部役員や美術部員等が、ねぶたづくりに取り組み、カーニバル当日は有志生徒と保護者が威勢のよいかけ声をあげながら、ねぶたを引いて市役所通りをパレードする。



PTAや地域の方々には、ねぶた制作段階から当日まで温かい励ましの言葉をいただいた。また、このカーニバルをきっかけに地域の一員として自覚が高まり、公園・歩道の除雪や落ち葉掃きに取り組む生徒の姿が徐々に見られるようになった。※ ねぶたカーニバルは、諸般の事情によって2014年度を最後に発展的な解消をした。

② 公民館主催運動会への協力

隣接する中央公民館が主催する中央地区町民運動会では、例年、運動会役員の派遣が本校に求められている。これを受けて、生徒会が有志生徒を募り、陸上部員やボランティア生徒が運動会の役員を務めている。これに



より、地域の方々と世代を超えた交流を深めることができた。

3) 教師が生徒のよさを認め、励ます試み

前述の中央ツイートや地域連携活動の取り組みに加え、教職員が主体となって生徒のよさを認め、励ます試みとして次の実践をした。

中央宝石賞（昔ながらの善行賞）の授与 【資料2 参照】

① ねらい エメラルドをはじめとするいくつかの宝石名が校歌の歌詞に用いられていることにちなみ、本賞を名づけた。かつて多くの学校で授与されていた善行賞を焼き直したものであるが、この賞の授与にあたって地域からの情報を反映させたことに新味がある。これにより関係教員は地域の各種会合に積極的に参加し、情報の収集に当たるとともに生徒のよいところを積極的に評価しようとする学校の姿勢を地域の方々に鮮明にすることができた。

② 方 法 学期ごとに該当生徒を集会等で表彰する。

③ 中央宝石賞授与事例 挨拶運動の推進役を務めた。自主的な清掃活動を継続した等。

4) さわやかな挨拶から学校の雰囲気をつくる……年間を通じた朝の挨拶運動



明るい学校づくりは、さわやかな挨拶を互いに交わし合うことから始まるとの思いから、生徒会が中心になり、年間を通じて朝の挨拶運動を展開した。

なお、挨拶運動は異年齢の縦割り生徒集団による組織的活動とした。この活動を通じて3年生はリーダーとしての自覚を深め、また、併せて自己の責任を果たすことによって自信を深めることにもつながったととらえている。

さらに下級生は上級生の活動を見ることや指示に応じることを通じて、自己の役割やうごきなどについて考えを深める機会となったと受け止めている。

5) 生徒活動場面の更なる創出

いじめや不登校対策に係わる研究⁽⁵⁾では、異年齢間の交流によって人とのかかわるよろこびを体験できると論じている。そこで、生徒会役員の意見を聞きながら次の取り組みを展開した。

① 小中連携活動で小学生にかかわり、自己肯定感等をはぐくむ

陸上部員が学区内の2小学校に出向き、小学校対抗運動会にリレー選手として出場する児童をコーチしたり、職場体験先の小学校等で指導アシスタント役等を経験をしたりした。



【児童・幼児と係わった主な職場体験先】 公立小学校2校、保育園3園、幼稚園5園、子どもセンター1

② 生徒総会や集会等で生徒が自主的な運営をし、成就感を得る

生徒総会や学年生徒集会では、生徒会顧問等の適切な指導・援助のもとに生徒の自主的な運営に委ねる場面を徐々に広げた。これによって、生徒会本部及び生徒会各委員会の活動アピールや意見表明は口頭だけに限らず、寸劇やパワーポイントを用いたものも見られるようになり、生徒の感性に響き、共感をよび、連帯感を深めるきっかけになった。また、これらに取り組む生徒の姿から新たなよさを見いだした教員もいる。

③ 生徒の手による校則の見直し

「中学校学習指導要領解説 特別活動編 2008.9」の第2節 生徒会活動 2 生徒会活動の内容 (1) 生徒会の計画や運営 (P.59) では、「ア 学校生活におけるよき校風の確立のための活動」において、「規律は、とかく拘束的なもののよう受け取られやすいが、むしろ豊かな充実した集団生活を営むためにこそ必要である。学校生活を律するきまりには、通常、学校の校則や生徒心得として定めたもの、生徒間の申し合わせによるきま

りなどが考えられる」としてある。本校の靴下に係るきまりは、同解説が示すところの“生徒間の申し合わせ”に位置づくものであり、従前から定められていた靴下の柄や色の制限について、現実を踏まえながら、その妥当性等について生徒会本部が課題を提起した。約1年間を費やして学級会や生徒総会等で議論を重ね、最終的には大幅な規制緩和がなされた。これらの活動を通じて生徒の自主的・自治的な活動が推進できたこと。学校生活をつくために集団としての意見をまとめるなどの話し合い活動がなされたこと。自分たちできまりをつくって守ろうとする活動が展開できたこと等は、特別活動の目標の一つである社会的な資質の育成に結びつくものと考えられている。



改正された靴下に係るきまり

4 相模原市立中央中学校が捉えた実践研究の成果と課題

3か年にわたる実践期間では、各年度末に自己肯定感をはぐくむ取り組みの評価・反省を重ね、指導の改善を図った。また、実践終了年度である2015年度末には、それらの総括をした。

評価・反省資料には、月別行事の反省、教職員の年間反省、生徒観察結果や教職員に寄せられた生徒の意見、保護者や学校評議員の意見等に加えて各年度末に実施する学校評価（生徒向けアンケート調査）を用いることとした。

ここでは、生徒意識の変容を示す生徒向けアンケート調査（経年）結果と実践終了年度である2015年度末職員会議にての教職員の意見及び校長による総括を当時のまま記載する。

1) 全校生徒向けアンケート調査の実施（各年度ともに1月末実施）

生徒の自己肯定感・自己有用感をはぐくむことに努めたことは、学校生活の充実や教師への信頼の向上、規範意識の確立に結びついたかどうかを年度末の学校評価（生徒向けアンケート調査）によって経年的に測った。

※ 数値は全校生徒の回答（％）

【問1】学校生活は楽しく充実しているか？

回 答 \ 年 度	2013 年	2014 年	2015 年
よく当てはまる	47%	44%	52%
やや当てはまる	38%	42%	31%
あまり当てはまらない	11%	9%	10%
まったく当てはまらない	4%	5%	7%

【問2】部活動や学級活動・生徒会活動が、自分を生かしたり、高めたりする機会になっているか？

回 答 \ 年 度	2013 年	2014 年	2015 年
よく当てはまる	36%	33%	41%
やや当てはまる	41%	47%	38%
あまり当てはまらない	16%	14%	14%
まったく当てはまらない	7%	6%	7%

【問3】先生は生徒を理解しているか？

回 答 \ 年 度	2013 年	2014 年	2015 年
よく当てはまる	23%	28%	30%
やや当てはまる	47%	50%	47%
あまり当てはまらない	19%	15%	14%
まったく当てはまらない	11%	7%	9%

【問4】日々、あいさつに心がけ、ルールやマナーを守ってきちんと生活しようとしているか？

回 答 \ 年 度	2013 年	2014 年	2015 年
よく当てはまる	37%	39%	49%
やや当てはまる	48%	49%	40%
あまり当てはまらない	11%	10%	8%
まったく当てはまらない	4%	2%	3%

2) 2015 年度 2 月 定例職員会議「教職員による年度末教育評価・反省」から一部抜粋

- ① 教職員の取り組みであった中央宝石賞をなぞって、生徒会本部が“中央たんぽぽ賞”設けたことを考えると生徒に善行を表すことの意味が伝わったと思う。
- ② 不登校の状況を改善するには至らない。また、特定生徒による暴力行為は生じているが、その総数は減少しつつあり、自己肯定感をほぐくむことの意義や教育効果を実感している。
- ③ 生き生きと活動している生徒やリーダーに協力しようとする姿勢の生徒が増えつつある。今の取り組みをさらに継続したい。
- ④ 教師間の協力を図り、中央ツイートを継続させたり、生徒会活動を助長する適切な指導を継続させたりしたい。

3) 校長による本教育実践の総括

教職員意見・生徒の状況及び生徒アンケート結果等をもとにして 2015 年度末職員会議にて校長が次のように本教育実践を総括した。

① 総 論

生徒向けアンケート調査では、全ての問いで「よく当てはまる」とのポジティブな回答をした生徒が増えている。このことは、職員会議の教職員意見③につながるものであり、本教育実践があげた一定の成果と考える。

しかし、「あまり当てはまらない」及び「まったく当てはまらない」とのネガティブな回答をした生徒は、問 1 を除いて微減傾向にあるものの大幅な状況改善には至っていない。このことは、職員会議の教職員意見②・④につながるものであり、すべての生徒に自己肯定感・自己有用感をほぐくむことは一朝一夕に成し遂げられることではなく、時間をかけて根気強くかつ丁寧に生徒に接していくことが必要であると受け止めている。

本教育実践がなされてから 3 か年が経過したところであるが、これらのことを踏まえて次年度も学校教育重点目標の達成のために本教育実践を継続することとする。

② 生徒会活動の活性化についての評価・反省

生徒会活動等への意識に係る生徒向けアンケート問 2 では、8 割に近い生徒が部活動や学級活動・生徒会活動が、自分を生かしたり、高めたりする機会になっていると肯定的な回答をしている。これに伴って生徒会活動等に取り組む生徒の姿勢も向上し、生徒会役員・委員に立候補する生徒が増え、本部役員のみならずに依拠しがちであった生徒会活動からの脱却が図られつつある。このことから、本教育実践が一定の成果をあげたものととらえた。

③ 教師と生徒と信頼関係についての評価・反省

教師への信頼感や安心感に係る生徒向けアンケート問 3 では、否定的な回答は減少しつつあるが、2 割強の生徒が教師批判や不信感を抱いている事実は重く受け止めている。教師と生徒との信頼関係は個々に論じるべき性

質があることは十分に承知しているが、日頃の生徒への接し方をはじめ学級・学年づくりをさらに質の高いものにしたたり、様々な教育手法を導入したりすることを今後、さらに目指したい。また、きめ細かな個々の指導に尽力しながら、生徒のよさを見だし、認め、自己肯定感をはぐくむ本取り組みを継続することによって、教師への信頼を一層高めたい。

④ 生徒の規範意識の改善についての評価・反省

生徒向けアンケート問4で、落ち着いた学校生活のバロメーターとなる挨拶やマナー、規則順守について尋ねたところ、8割強の生徒が肯定的な回答をしている。

しかし、残念ながら校内においては、いじめ・暴力行為等の生徒指導上の諸課題は減少傾向にあるものの、職員会議の教職員意見②のとおり、特定生徒による数度の暴力行為が生じており、事態改善の過程にあるのが実情である。

また、不登校生徒数も横ばいであり、関係機関との連携や自己肯定感をはぐくむ取り組みを一層進めて、その未然防止と早期対応に力を注ぎたい。

Ⅳ 中央中学校の教育実践等を踏まえた大学における「特別活動論」の授業づくり

1 中央中学校の教育実践を再考する

学校運営や教育実践研究の基本に据えるべきものとして「学校の母体は学級であること」があげられる。いかに優れた学校運営構想を描いても、学校生活や学習活動の基盤である学級が揺らいでしまったら、それは画餅に帰してしまう。学級には生徒個々が自己存在感をもつこと、生徒と教師の信頼関係や生徒間の共感的関係がなくしてはならない。そして、それらに支えられながら諸活動を通じて自己肯定感や自己有用感、はぐくまれる。同校が本教育実践の評価項目に掲げた「教師と生徒と信頼関係についての評価・反省」は、学校教育を改善し、さらにその質を高めるために欠かせない評価指標である。学級経営で、どのように信頼関係を築き、生徒に自己肯定感や自己有用感をはぐくんでいくかという道筋を明らかにすることも古くて新しい教育実践研究の主題である。自己肯定感や自己有用感をはぐくむことに近道はない。校長による総括にも示されているように、時間をかけて根気強くかつ丁寧に生徒の接していくことを通じて、はぐくまれるものであり、同校の今後の継続的な取り組みに期待したい。

また、折しも教職員の世代交代の激化に伴って新採用教員が学級担任を務めることが増えてきている。さらに次の項で述べるとおり、現在、中央教育審議会では学級経営の充実が審議されている。これらのことを踏まえると同校が3か年にわたり追求し続けた自己肯定感や自己有用感をはぐくむことの教育的意義やその手法を教職員や教職を学ぶ学生に広め、学校の母体である学級づくりをはじめ、特別活動及び生徒指導の充実を図ることが肝要と考える。

2 中央中学校の教育実践と次期学習指導要領を踏まえた「特別活動論」の授業づくり

中央中学校の教育実践は、主として生徒会活動に焦点を当てたものであったが、同校が取り組んだ自己肯定感や自己有用感をはぐくむことは、特別活動を構成する学級活動や学校行事でも大切にすべき視点と考える。

また、大学の特別活動論の授業においては、教師・生徒間及び生徒相互のよりよい人間関係づくりによって、学級や学年に支持的風土が醸成され、学級活動をはじめ学校教育活動が活性化する。また、その活動を通じて生徒個々に自己肯定感や自己有用感がはぐくまれ、さらに生徒が育つ。このようなプラスのスパイラル効果を同校の教育実践を引きながら教授していきたい。

さらに、前項で自己肯定感や自己有用感をはぐくむ学級経営の必要性について触れてきたが、2030年の社会と、そして更にその先の豊かな未来を築くために、初等中等教育が果たすべき役割を示すことを意図した中央教育審議会による「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」が本年8月に公表された。

この「まとめ(案)」pp. 50-51においては「8. 子供一人一人の発達をどのように支援するか ―子供の発達を踏まえた指導―」の「学習活動や学校生活の基盤となる学級経営の充実」の項で、特別活動を展開する代表的

な場である学級の重要性について次のように述べている。

- 学校における、子供たちの学習や生活の基盤となるのが、日々の生活を共にする基礎的な集団である学級やホームルームである。これまで総則においては、小学校においてのみ学級経営の充実が位置付けられ、中学校、高等学校においては位置付けられてこなかった。
- 今回、子供たちの学習や生活における学校や学級の重要性が、今一度捉え直されたことを受けて、特別活動においても、第2部に示すとおり、学級活動・ホームルーム活動の中心的な意義を踏まえた上で改善が図られることとされている。総則においても、小・中・高等学校を通じた学級・ホームルーム経営の充実を図り、子供の学習活動や学校生活の基盤としての学級という場を豊かなものとしていくことが重要である。

学校における特別活動の推進役は学級担任である。学級を生徒一人ひとりの心拠りどころに高めていくことは学級担任である教員の力量に負うところが多い。常に生徒理解に努めながら居場所と出番のある学級づくりをすることには、倦むことのない教育への情熱と確かな専門性が欠かせない。

また、前述のとおり、現在、新採用教員が学級担任を務めることも多くなっている。このことから教職課程における特別活動論の授業に実践的側面を一層盛り込み、学校から即戦力として期待されるような人材を育てたり、特別活動の目標と内容、さらにはその手法に精通する学生を輩出したりするために次のような取り組みをしたい。

1) 特別活動の特性と教師の姿勢を学生に伝える

特別活動論の授業を通じて様々な教育実践を紹介しながら、次の4点を学生に理解させたい。

① 教科書がない

教育課程の大半を占める教科指導には、主たる教材である教科書が無償支給されているが、特別活動にはそれに当たるものがない。このことから、教員は教育法規や各学校の教育目標、さらには「学習指導要領」や「同 解説」に向き合い、その具現化を図るために年間指導計画を立案し、本時の指導計画づくりや諸準備に当たらねばならない。教師には専門職である自己に与えられた裁量を活かし、学級や生徒を理解し、それに応じた特別活動の企画・調整・実践が求められており、単なる前例踏襲の指導に漫然としてはならない。

② 生徒は活動を通して学び、自己を成長させていく

学級生徒だけでなく、異学年生徒とかかわったり、教室を離れて体験的な活動に取り組んだりする中で生徒は自ら活動を通して学び、自己を成長させることに特別活動の特性がある。

そのため、教師には充実した活動が展開できるように入念な事前・当日・事後の教育計画づくりが求められる。また、生徒の人格形成に大きくかわる領域でもあることから安易なスリム化・効率化は慎むべきものでもある。

③ 教師には支援・援助の姿勢が求められる

教師は自ら範を示すことや旗を高く掲げて生徒の先頭に立つことが必要な場面があるが、特別活動ではともに考えたり、ともに歩もうとしたりする姿勢が求められる特性がある。とりわけ生徒会活動では、それが顕著である。生徒を中心に置き、必要な情報や資料を十分に提供し、生徒の自主的な活動を側面から援助することが大切であり、受容的な態度で根気よく継続して指導を続けることが必要とされる特性を強調したい。

④ 特別活動の指導は学級担任の基本的な役割であること

学級活動、生徒会活動、学校行事の指導に年間を通じて当たることが、学級担任の役割である。日々の生徒観察や言葉かけ、朝や帰りの短学活・清掃活動といった毎日の積み上げを通じて教師・生徒間の信頼関係を築くことが求められている。これらの日常的な営みから生徒は感化されていく存在であることを自覚して、教育活動に取り組むことが重要である。

また、学級経営を授業で扱う際には、中央中学校の取り組み等を教材とし、学級で自己肯定感をはぐくむ道筋を学生とともに考えていく。

2) 生徒指導の機能を十分に生かした特別活動にする必要性を伝える

Ⅲで紹介した中央中学校の教育実践のねらいには、不登校・いじめ・暴力行為といった今日的な生徒指導上の諸課題の改善があった。生徒指導は、学習指導要領第1章総則の第4の2の(3) p. 18が示すように、「教師と生徒の信頼関係及び生徒相互の好ましい人間関係を育てるとともに生徒理解を深め、生徒が自主的に判断、行動し積極的に自己を生かしていくことができるよう」に指導・援助を行うものである。

特別活動は、その目標や内容、指導の形態や方法において生徒指導と深くかかわるものがあり、共感的人間関係を築いたり、自己決定を重んじたりする生徒指導の機能を特別活動に生かすことが大切である。中央中学校の教育実践は、このような考え方に沿ったものであることから、その教育実践を教材に用いて、自己肯定感・自己有用感をはぐくむこと及び特別活動と生徒指導とのかかわりの重要性を学生に理解させていきたい。

3) 人間関係づくりの手法の紹介・体験

前述した子どもたちの対人関係や社会性の未熟さの指摘に加えて、ネット社会の負の側面とも言えるネットいじめ、メールに起因した生徒間のいざこざ等が、ここ数年来、生徒指導事例となっている。直接、言葉を交わせば意思疎通ができることがらでも一方的な通告のような発信がなされることによって感情の齟齬が生じたり、事態の複雑化を招いたりしている。

このようなことから、学校においては、情報活用能力や情報モラルの指導に加えて、特別活動等を通じて人間関係を築くための態度や技能を育てることが求められている。これに備えて、構成的グループエンカウンター、アサーショントレーニング、アンガーマネジメント等の教育手法を学生に伝え、また、それを体験する機会を授業で設けていきたい。

4) これからの教育改革の動向を授業に反映すること

今後、中央教育審議会による答申がなされ、その数か月後には改訂された学習指導要領が告示されることになる。そして移行措置、完全実施を迎える。これらの期間に、その教育改革の内容を把握したり、先行実践事例の収集に努めたりして、新しい教育課程の担い手になる優れた教員を育てるための授業づくりを進めたい。

V まとめ

生徒指導上の諸課題の改善を目指した相模原市立中央中学校の教育実践の考察や中央教育審議会の審議のまとめ(案)を通じて、大学における特別活動の授業づくりを論じてきた。同校が取り入れた自己肯定感や自己有用感をはぐくむ取り組みは先行研究が示したとおり、同校の生徒指導の充実や学校教育の改善に一定の成果をあげたと言える。現在の生徒たちの状況を考えると、自己肯定感や自己有用感をはぐくむことの意義やその手法は、特別活動や生徒指導をはじめ学校教育全般に広めるべきものととらえており、上記Ⅳの2で述べたように大学においてもそれを反映した授業づくりをしたいと考える。

また、この度は、大学教員としてやや俯瞰的な位置から自己の教育実践を振り返ることとなり、己の校長として力不足に気付くとともに学校教育に学問的な知見を活かすことの重要性を改めて知った次第である。

このような反省がある一方、筆者とともに学校づくりを担った教職員の皆さんの勤務時間や持ち分を超えて献身的に尽力する姿は未だに脳裏に鮮明に残り、その努力と心意気に敬意を表したい。現在の職責を果たすとともに彼らの期待に応えられるような教員養成に当たりたい。

【資料1】 中央ツイート実施要領

1 ねらい

各行事における様々な取り組みの評価・反省を全校生徒で行い、行事等の改善や意識の向上を図る。また、自分の考え・アイデア・メッセージ等を表現し、互いに高め合う関係をつくる。

2 方法

- 1) 図書室前の生徒会掲示板に中央ツイートコーナーを作り、該当する委員会欄にツイート用紙を貼る。ツイート用紙には、書いた生徒の身分証明書番号を記載する。

- 2) ツイート用紙に記入する内容は、良かったこと、よくできていること、良かった行動や態度、さらに工夫すると良いこと、さらに良くするためのアイデア等とする。
- 3) ツイート用紙に記入してはいけない内容は、他人の批判や悪口、人を否定すること、悪ふざけと思われるもの等とする。

3 活 用

- 1) 生徒会本部は、中央ツイートの管理を行いながら、ツイートをとりまとめて該当する委員会に配付したり、書かれたことを検討し、今後の活動に生かしたりする。
- 2) 生徒会本部は、年間ベストツイートを選び、生徒集会等で発表する。

【資料2】 中央宝石賞授与の取り組み

1 ねらい

望ましい行動を「認める」「褒める」ことで、能動的に行動しようとする心や態度を育てる。

2 方 法

- 1) 生徒の生活（通学中、学校、地域社会等）の中で、望ましい行為、行動、活動等を認める。
- 2) 学校生活全般での実績、意欲的な活動、成果、ボランティアなどを対象にする。
- 3) PTA、地域社会（公民館、子どもセンター、自治会、民生委員など）にも広報活動をし、生徒の望ましい行動などについての情報収集をする。

3 期待される教育効果

認められることで、満足感等を感じ、意欲的、創造的に行動しようとする心の基盤をつくることができる。また、「尊敬される上級生」「あこがれの上級生」が増え、生徒のモデルが増える。 ～ 以下、省略 ～

【参考文献等】

- (1) 朝日新聞 2015.10.24 夕刊
- (2) 教育研究員研究報告書「生徒会の一員としての自覚をもち、生徒会活動に意欲的に参画する態度を育てる指導の工夫 2010 年度」東京都教育委員会 によると、抽出調査ではあるが生徒会の一員であることの自覚をもつ中学校生徒は全体の 4 割を下回っている。
- (3) 中央教育審議会「次代を担う自立した青少年の育成に向けて（答申）」2007.1 P.3
- (4) 全国学力・学習状況調査（質問紙調査結果）では、「自分には、よいところがあると思いますか」との自尊感情を問う質問紙調査で、「どちらかと言えば当てはまらない」及び「当てはまらない」と回答した中学校 3 年生の合計は、平成 24 年度 31.4%、25 年度 33.3%、26 年度 32.6%、27 年度 31.7%である。
- (5) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『子どもの社会性が育つ「異年齢」の交流活動』2011.6 PP. 4-8